國民畫鑑

國民畫鑑序

美育の知育、德育と相並びて、常識の圓滿なる完人を冶鑄する上に缺くべからざるは、茲に喋々を要せざるのみならず、苟も人として趣味を有する者は、常に藝術の作品を玩賞して、其の美感の享受に高尚なる精神の滿足を求めざること能はず。是を以て圖畫は夙に小學以上中等普通教育上の一科目として、遍く男女の少年に課せられ、美術の名品は大方人士の爭ひ索めて尊重措かざる所なり。然れども我が國現今の狀態を見るに、圖畫教育の方法は、粉本を授けて之を臨摸せしむるか、又は尋常の風景事物を寫生せしむるに止まり、或は放課娛遊の間、繪畫、彫塑の名品を生徒に寓目せしめて、知らず識らずの裡に其の美的感覺を刺戟し、以て高尚純潔なる趣味を發育せしむる方法なく、或は教師の時に生徒に示して製作の佳趣妙味を說明し、以て美醜を了簡せしめ、又は教師自身の研究の參考に資すべき恰好の材料あることなし。啻に然るのみならず。日本の美術を愛好し、其の古今變遷の大要を尋ね、其の名作の妙趣を概見せむと欲する者の爲に、復適當の標本あるを見ず。實に斯道の一闕典なり。而して是等の目的に用ゐる所のものは名作の原品を以て蒐集することは、固より普通學校又は個人の能くする所に非ずして、必や之を複製品の撰輯に求めざるべからず。予夙に此の種のものゝ我國に闕如たるを慨し、先づ主として是等の需要を充たすべき名畫集を編輯せむとすること茲に歲あり。然れども我が國は、歐米諸國の如く天下の名品盡く公私の諸美術館に收藏陳列せられたると大いに其の趣を異にし、大抵皆貴族富豪の私有に屬して寶庫の中に祕藏せられ、容易に觀覽の便を得ざるが故に、之が撰集極めて困難なるのみならず、其の撮影亦頗る煩雜なる交涉と鉅額の費用とを要するを以て未だ志を遂ぐることを得ざりき。然るに完良なる美術書の發行を以て有名なる審美書院は、數年來既に種々の大畫集を印行し、帝室の御物、博物館の藏品等を首めとして、遍く諸家寶襲の名品を撮影し、材料極めて豐富なるを以て、即ち同院に交涉し、其の材料を利用して予の宿志を果さむことを企て、先に日本名畫百選を撰輯してこれを世に公にせり。然れどもその普及未だ廣からざるを以て、更に同院をしてこれを縮小して本書を發行せしむるに當り、多少の改訂を加へ、名を改めて國民畫鑑と云ふ。庶幾はくは以て日本繪畫變遷の梗概を提示し、日本美術に對する趣味開發に裨補あらしめむことを

明治四十二年二月

東京美術學校長　正木直彥識

Tokyo, 1909. 13 pp. Japanese text
100 B/W pls.

國民畫鑑目次

國民畫鑑

東京美術學校選輯
同校教授大村西崖編述

第一編　古代

第一章　小墾田時代（推古天皇の御代を主とす）

凡そ何れの國も、その開明の倘草昧に屬する頃は、藝術と雖も僅に萠芽として見るべきのみ。我が國も太古の繪畫は、墳墓の石壁等に畫ける人形、文様の類あるのみにて、その技術の稚く拙きことは、殆ど今の世の兒戲と一般なり。その始めて美術としてこれを談ずるを得べきに至れるは、佛教渡來以後の事に係る。蓋し、支那の美術の漢魏六朝の間に次第に發達し、又佛教と共に遙に中央亞細亞以西及印度等の技巧、樣式をも傳へたりしもの、三韓に傳はり、文學及工藝と共に、まづ三韓よりしてこれを我が國に傳へ、又支那の南部よりも次第に流傳せしもの、佛教の渡來、勃興に由りて、忽ち長足の進歩を爲しゝものなり。

佛教の渡來に先だち、雄略天皇の朝に、百濟の畫人因斯羅我の徵に應じて來れるあり。佛教渡來の後、崇峻天皇の朝に、又百濟より畫工白加の貢せられ來るあり。推古天皇の朝に至り、聖德太子の大いに佛教を興隆したまふや、世業の畫師を定めてその戶課を免せられなどしたまひし爲にや、繪畫も頗る發達せしものゝ如く、始めて遺作を今に傳へたり。これを玉蟲厨子（大和法隆寺國寶、推古天皇御物、玉蟲の羽を裝飾に用ゐしよりしか名づく）の密陀繪（密陀僧と云ふ物もて繪の具を調して畫ける故に云ふ。第一圖は厨子臺座右側面の畫、施身聞偈の圖、釋迦佛の前身たる大仙人が、帝釋天の化したる羅刹に身を施すことを約して、過去佛の說けりし偈文を聞き、これを石に錄し、身を羅刹に投ぜしに、羅刹即ち帝釋天の本身に復して、これを空中に攝取する所）とす。密陀繪は蓋し支那より傳はりし手法なるべく、色彩は僅に白、黑、赤、黃等の三四種に過ぎず。描法極めて稚癡、曲線に一種の形式ありて、物象は殆ど文様の如し。

第二章　飛鳥時代（舒明天皇より文武天皇まで）

舒明天皇の朝に始めて遣唐使を出しゝより、孝德天皇の朝に至りては、制度、文物悉く唐風を學びて、謂はゆる大化の革新を行ひしほどなれば、繪畫も唐より藍本を傳へきと見え、前代の三韓風漸く面目を改めて、これより次第に唐風の影響を高めしものゝ如く、繪事の盛なること、復前代の比に非ず。畫人の名を史乘に留めし者には、狛竪部子麿、鯽魚戶直某等あり。繡像の大製作及織成の佛像等行はれ、繪の具も內地に產出せし（文武天皇の朝、始めて諸國より彩色を獻ぜしめたまふ）のみならず、宮殿の制は唐式に倣ひ、文物も概して進みし爲、建築及器物を彩飾する事の漸く多きを致しつればにや、宮廷に早く畫工司（大寶令に出づ、中務省所管、正一人（掌繪事彩色、又判司事、佑一人、令史一人、畫師四人、畫部六十人、使部十六人、直丁一人の定員相當位、正は正六位上級、佑は從七位下階、令史以下畫工は大初位上階の定めなり）の設けありき。この頃の遺作にして今に存するものは、橘夫人厨子（法隆寺國寶）の密陀繪、聖德太子御影（帝室御物、太子と太子の弟殖栗王（右）及太子の御子山背大兄王（左）とを圖せり、第二圖）法隆寺金堂壁畫（國寶、第三圖は北壁東脇の藥師剎土圖と稱するもの）等あり。勸修寺（山城）の刺繡釋迦牟尼佛說法圖（國寶）も、圖樣、作風法隆寺壁畫に酷似せり。これを前代の

その他は鳥毛を貼りて裝飾せしもの、今は鳥毛全く剝落して、下繪露れたり、天平勝寶四年乃至同八年の作なり、第四圖はその最も全き一扇布帳菩薩圖、正倉院寶物、麻布に墨畵にて菩薩の像を圖せり、天平乃至天平勝寶頃の物ならむ山水圖、正倉院寶物、麻布に墨畵の山水を圖せるもの二枚あり、年代同上東大寺大佛臺座蓮花瓣に刻せる佛菩薩圖天平勝寶元年大佛鑄成より、同四年の供養會までに成りしものならむ及吉祥天圖大和藥師寺國寶、孝謙乃至光仁天皇頃の作ならむ、第五圖等あり。これを前代の物に較ぶるに、技巧大いに進みて唐風と爲れるを認む。

第四章　平安王朝時代 桓武天皇より光孝天皇まで

桓武天皇の遷都と共に、文化の中心は奈良より平安に移り、宗教、文學、書道、風俗等に唐風の愈〻行はるゝに伴ひ、繪畫にも唐風は益〻醇熟して、且前代とは變化せり。殊に密教眞言宗と天台宗の一部分と、弘法大師、智證大師これを傳ふ新に傳はりて、以前の佛教南都六宗、密教の外を皆顯教と云ふの談せざりし種々多樣なる諸尊佛あり、菩薩あり、明王あり、天部の諸神あり、元婆羅門教より來る眞言宗の胎藏界曼荼羅にて普通四百十四尊ありの圖像を需要し、その粉本をも新に多く齎せし入唐八家の請來目錄に記されたりかば、佛教畫は爲にその面目を一新せり。この密教の繪畫は同く唐風と謂ふと雖も、以前の顯教の唐風が初盛唐の風なると異なりて、中晚唐の風なれば、曼荼羅一本尊に關係ある諸尊を網羅したる圖と云ひ、一尊圖と云ひ、啻に密教の教理より來れる圖式及像容を顯教畫に異にするのみにはあらで、畫風も從ひて同じからず。これより後、藤原時代の長き間を通じて、平家時代に至るまで、佛教畫には顯教風と密教風との差別あり。啻に然るのみならず、密教の僧侶は、その傳授に師の口訣を受け、祕密の儀軌行法、觀想乃至諸尊像の圖畫、彫刻の法式等を記したるもの數百卷ありを筆寫する必要ありて、儀軌の理解は圖畫に待つこと少からざるたとへば、大日經を解するには胎藏界曼荼羅、金剛頂經を解するには金剛界曼荼羅なくてはかなはぬが如しが故に、爾來僧侶にして畫技に長けたる者多きに至りぬ。

前代に職事の盛を極めたりし畫工司は、平城天皇に至りて廢せられ、內匠寮に合併して、畫工の定員も減せられぬ。蓋し新都の造營も既に成り、又前代の如き官府の事業としての寺像の建立も多からず、僅に宮廷の調度等に用ゐる彩飾の事のみと爲りしが爲ならむ。

これより後、內匠寮畫人の勤むる所を畫所と稱す。而して畫所の畫人は皆職工の如き者なりければにや、その名を史乘に留めたるは、僅に承和三年に遣唐畫師を命せられし良枝宿禰朝生等ありしに過ぎず。これに反して、尋常士人の畫を能くする者頗る多く、建築、器物の彩飾の外、單に玩賞に供する繪畫は、寧ろこれ等の人の所作の重んせらるゝに至りしものゝ如し。その最も秀でたるを百濟河成仁壽三年卒、七十二歲とす。蓋し玩賞畫は前代よりも有りしこと、正倉院の屛風畫等にても知らるれど、その大いに發達せしは、河成の頃よりなるべし。屛風に景色畫、風俗畫等を書きしことは、古今集、拾遺集の歌の詞書にても知らる。

僧侶の畫に長けたる者には、弘法大師、承和二年寂、六十二歲智證大師寛平三年寂、七十八歲等あり。弘法大師の遺作には龍猛菩薩圖第六及龍智菩薩眞影京都教王護國寺(東寺)國寶あり。その唐より寫し歸りし諸尊圖は、摸本五大尊、四種曼荼羅護摩壇樣卅七尊等、醍醐寺に在り、國寶もて傳はれるもの少からず。これを御筆樣と云ふ。智證大師の遺作と傳へ稱するものには、黃不動明王像或は畫工光空に畫かしめきとも云ふ、近江園城寺(三井寺)國寶亦不動明王像紀伊高野山明王院國寶等あり。その唐より寫し歸りし諸尊圖は、亦摸本胎藏舊圖像、胎藏圖像、五部心觀圖、大悲胎藏三昧耶曼荼羅圖、八大明王圖等、醍醐寺等に在りもて往々今に傳はれり

書に較ぶるに、技巧頗る進みて唐風に近づき、殊にその陰影ある手法及人物の面相、姿勢等には、印度風の影響顯著なるものあるを認む。

第三章　奈良時代（元明天皇より光仁天皇まで）

元明天皇和銅三年、都を奈良に奠めたまひしより、光仁天皇に至るまで、聖武、孝謙、稱德天皇の御代を中心として、七十餘年の間、佛敎の大興隆に伴ひ、文物の盛なること遙に前代に超え、繪畫も亦大いに進歩して、その面目を改めぬ。この時代に在りて最も目ざましきを、天平乃至天平寶字の頃に於ける畫工司職事の盛況とす。當時皇室に於いて經疏を書寫し、寺堂を建立し、佛像を彫造せらるゝこと極めて多く、寫書所、寫經所、寫疏所、造東大寺司、造東寺司、造石山院所、造佛所、厨子畫所、繪華盤所等新に設けられ、佛畫及寺堂、佛像の彩飾より、厨子、佛具乃至經卷の繪軸等に至るまで、大抵皆畫工司（畫師司とも云ひき）の畫工をしてこれに從事せしめられき。その殊に盛なりしは、大佛開眼供養會及聖武天皇御一周忌に用ゐる佛具、竝に大佛殿建築の裝飾に在りしなり。當時畫工のこれに從事するに、塗白土畫師、（木地を塗る者）木畫師、（素線を畫する者）堺畫師、（骨法を畫く者）彩色畫師、（彩色を施す者）撿見畫師（出來ばえを撿査する者）等の分業ありき。かくの如くその職事の盛なりし爲にや、畫工の待遇も改まりて、養老三年には、畫工司の畫師等をして笏を把らしめ、その後畫師の賜姓の事往々國史に見え、天平乃至天平寶字頃の畫工には、位階の大寶令の所定より高き者あり。正倉院（聖武天皇の御遺物等を大佛に獻じたるを納めし歷代勅封の帝室寶庫にて、奈良大佛殿の西北に現存す）の古文書に依りて、この頃の畫工百數十人の姓名を知ることを得。その中には、住所、年齡、官位、分業、功料等の尋ねらるゝも少からず。畫工司の正、佐、令史も、啻に刀筆の吏たるのみにはあらで、能くみづから畫きしなり。息長丹生眞人大國、（令史、少初位下）河內畫師次万呂、（畫師司長、正七位下、河內國丹比郡土師里の人）竹志麻呂、佶黄文連乙万呂、（令史、正七位下）上村主牛養、（畫師司長、從七位下、堺畫師、木畫師又塗白土畫師）同牛甘（畫師司長、從七位下、右京九條四坊に住せり）等よりして外、畫工の稍著れたる者には、秦連稻村、（畫師、從八位下）簀秦麻呂、秦堅魚、息長豐穗、赤染沙彌万呂、勝老足（この六人は天平勝寶四年六宗厨子に畫ける主任者）等あり。正倉院の寶物に、裝飾畫ある器物（何れも天平勝寶頃の物）少からずして、その技術の極めて巧妙なるは、蓋し皆當時の畫工司畫人の手に成りしものなればならむ。

畫工司の職事は、上に述べたるが如く、建築、器物の彩飾多きに居りきと雖も、國史及古文書に、佛敎畫の製作せられしものゝ記載亦少からず。その中最も多きは、種々の淨土變なりき。

繪の具は文武天皇の頃よりこれを內地に產し初めしが、元明天皇の時、勅して諸國郡內生ずる所の繪の具の品目を申し上げしめしより、その種類も產量も多きを加へしものゝ如し。されば正倉院の古文書及器物の裝飾畫等に依りて、當時用ゐし繪の具には、朱沙、丹、蘇芳、烟紫、紫土、同黃、青黛、藍花、紅青、白青、空青、金青、白綠、綠青、金薄、銀薄、金墨、銀墨、胡粉、阿膠等の具はりしことを知る。

この時代の繪畫の遺品には、過去現在因果經、（全卷上段は繪畫、下段は經文、東京美術學校、京都上品蓮臺寺（國寶）、醍醐報恩院（國寶）に各一卷を藏す、天平七年の作なり）鳥毛立女屛風、（正倉院寶物、六扇あり、皆樹下美人を畫き美人は顏と手とを彩色し、

とせり。蓋し惠心僧都の創めし所ならむ。この風の佛敎畫は多く截金彩色を用ゐる。截金彩色は亦本時代に於て最も發達せり。惠心の後に出でゝ最も著名なるを鳥羽僧正（保延六年寂す、八十八歳）及珍海（基光の子、仁平二年寂す、六十二歳）とす。鳥羽僧正が智證大師等の佛敎畫の粉本を寫しゝものゝ摸本（智證大師の條に記せし三昧耶曼茶羅等）あり。古今著聞集に僧正が戲畫を作りしことあるより出でゝか、當時行はれしおこ繪の妙手として、その名後世に高く、栂尾（山城）高山寺の戲畫（三卷あり、國寶、第九圖はその一部分、又勝畫あり）傳へてその作と稱す。志貴山緣起（大和朝護孫子寺國寶、三卷、第十圖はその一部分）亦同じ。珍海は專ら佛畫を作りぬ。その摸本帝釋天圖（元高山寺本）等あり。

寺堂の建立及祈禱の流行に由り、佛敎畫の需要甚多かりしかば、本時代の末つかたに至りて、佛敎畫を以て專業とする者出で來ぬ。これを繪佛師と云ふ。その始めて僧綱（法印、法眼、法橋の位を云ふ）の補任を受けたるは、敎禪（治暦四年始めて法橋に敍せらる、承保二年歿）なり。これに次いで最も著れたるを應源、（永久、保延頃）智順（康治、仁安頃）の二家とす。應源曾て鳥羽僧正の命に依りて、智證大師の佛敎畫（大師の條に記せし胎藏舊圖樣及胎藏圖像等）を寫しゝものゝ摸本、今に傳はれり」。

本時代に佛敎畫の需要夥しかりしことは、前にも述べつ。佛堂の扉、柱、壁等に畫くとも行はれ、（前出鳳凰堂壁扉畫の外、山城日野法界寺壁畫の遺品あり、榮花物語に法成寺（藤原道長建立）の扉、柱畫の事見ゆ）殊にその末つかたに及びては、公家の日記（水左記、中右記、永昌記、長秋記、台記、人車記等）に見えたる佛敎畫製作の記載、枚擧に遑あらず。以てその盛況を詳にするに足れり。加ふるに、佛敎畫は信仰の爲に製作啻に偉大なるものあるのみならず、その保存も爲に全きことを得しを以て、本時代の遺品は、殆ど佛敎畫と佛敎家の肖像とのみなりと謂ふも過言に非ず。前出數點の外、畫者の傳を逸したる名品の若干を列擧すれば、顯敎畫及肖像に藥師寺（大和）の慈恩大師像（國寶、第十一圖）法華寺（大和）の觀音、勢至二菩薩圖（第十二圖、國寶、阿彌陀如來及童子圖と共に三幅あり）長法寺（山城）の佛再生說法圖（第十三圖國寶）等あり。最も多き密敎畫には、帝室博物館の普賢菩薩像、（第十四圖）横濱原富太郎氏の孔雀明王像（第十五圖）等あり。その餘尙少からず。

宗敎に關係なき繪畫も、本時代に至りて大いに發達流行し、皇居を始め奉りて、縉紳の間に屏風、障子の畫は盛に用ゐられ、后妃の入內、大臣の大饗、壽賀等には、新に數十百帖の屏風を造りて、これに畫かしめ、能書を撰びて詩歌を題せしめき。されば其の事の史書に記されたるもの少からず。又拾遺集（畫を好みてこれを善くしたまひし花山天皇の御撰）等に、屏風畫の題詠甚だ多し。以てその圖樣を察すべく、又以てその倭繪なりしことを推すべし。歌繪、（歌の心を畫けるもの）葦手（繪の中に歌の文字を書き加へたるもの、共に後撰集、拾遺集に見ゆ）もこの時代に始めて起り、紙繪（源氏物語等に見ゆ）と稱して單幀畫を集め、又は物語、日記等の冊子、卷物の文中に挿畫ある（源氏、榮花物語等に見ゆ）を作りて玩ぶこと、及繪合せ（源氏物語に見ゆ、著聞集に永承五年の繪合あり）の遊戲等も、亦始めて行はれき。挿畫ある卷物は謂はゆる繪卷物にして、これより後次第に行はれ、鎌倉時代に至りてその盛を極む。卷物又は色紙等の佛經を美麗に裝飾することも、この頃に始まりぬ。（榮花物語に見ゆ）扇畫は前代より有り（都氏文集に見ゆ）しが、本時代に至りては、往々高麗を經て支那に傳はり、摺疊扇としていたく彼の土に賞せられき。（宋の鄧椿の畫繼、郭若虛の圖畫見聞志等にその評賞見ゆ、本時代末乃至次の時代の遺品なる檜扇嚴島神社に存ぜり）これ等の遺品は、今に存ずるもの佛敎畫の如く多からず。屏風畫に東寺の山水屏風（第十六圖、國寶、絹本著色）あり、寫經の類に扇面法華經下

この時代に於ける佛教畫製作の事の、國史及古文書に記されたるもの少からず。殊に著きは、承和五年以來佛名懺悔會の行はれしに伴ひ、貞觀前後、多く一萬三千佛像を作り、これを諸國に頒布せしことにして、猶前代に於ける國分釋迦像國分淨土畫に同じ。されば、前記二大師遺作の外にても、この時代の繪畫の遺品は、殆ど皆佛教畫（京都高雄神護寺國寶紺綾金銀泥繪兩界（金剛、胎藏曼荼羅）曼荼羅（弘法大師請來又は御筆と傳稱すれど非なり、高雄曼荼羅と云ふ）、大和西大寺十二天（弘法大師筆と傳稱す）、大和室生寺金堂特別保護建造物、弘法大師建立板壁畫帝釋天曼荼羅等）にして、その餘は僅に僧侶の肖像（高野山普門院國寶に勤操僧都像あり、承和二年乃至延曆廿一年の作）あるのみ。

第五章　藤原時代（宇多天皇より近衛天皇まで）

前章に述べたる所の如く、唐の影響に由りて、我が文物の爛熟せし頃、唐の天下いたく亂れしかば、宇多天皇の寬平七年遣唐使を廢し、爾來支那との國際交通は久しく絕えにき。こゝに於いて、我が國は既成の開明を基として、獨りみづから發展し、以て前代に見ざりし一種の國風を化成せり。文學には國文盛に行はれ、宗教は殆ど祈禱と念佛とに爲り了りて、世風の華奢文弱なりしと相伴ひ、この時代に發達したる倭繪は、その趣味極めて優美と爲りぬ。

本時代の初めに於いて、最も著き畫苑の事歷は、後世我が國の畫聖とも仰がるゝ巨勢金岡（仁和、寬平頃）の世に出でしことなり。これよりして、巨勢家は數代の間、殆ど畫界第一の門閥たりき。金岡の子に公忠（天曆頃）公望あり。公望始めて繪所長者たり。畫風も公望に至りて一變しつゝ蓋し、倭繪の畫風漸く成りしならむ。公望の孫に弘高（長保頃、繪所長者）あり。畫名殊に高かりき。弘高の後、是重（長元頃）信茂（大治、長承頃）及次の時代に入りて宗茂（久安、仁安頃）等あり。竝に繪所長者たりと雖も、家聲は復揚らざりき。巨勢家以外の畫人には、公望と同時に爲氏及飛鳥部常則（公望は小上手、常則は大上手と呼ばれき）等あり。降りて永承の頃、繪所長者爲成あり。その遺作たる鳳凰堂（特別保護建造物）の扉及板壁の釋迦八相及阿彌陀佛九品來迎の圖は今に存せり。（第七圖はその一部分、堂南東隅扉繪、永承六七年乃至承保元年の作）應德乃至康和の頃、藤原基光あり。土佐派はこれを以てその始祖とす。遺作と稱する相撲の畫の摸本一卷（圖中「已上公持」「已上基光」「公持」「阿闍梨公など所々に記したれども信じ難し）を傳ふ。基光に次いで藤原隆能（仁平、久壽頃、繪所預、基光の子には非ず）あり。隆能の後數代の間、皆春日と稱せしを以て、これを春日派又は古土佐派と稱す。長承の頃宅磨爲遠あり。根來（紀伊）大傳法堂の壁畫を作りしを以て著る。これ即ち宅磨派の祖なり。（前の爲氏は宅磨氏なりしや否や明ならず）宅磨派は佛教畫の一の新派にして、從來の顯敎風の變化せしものゝ如く、又新に支那の宋風（奝然の十六羅漢を宋より齎し、天台座主覺慶の時、宋の天台山より智者大師像等を送り來りし等、傳來少からざりしならむ）を傳へしものなり。僧侶にして畫を善くせし者には、まづ會理僧都（承平元年寂す、八十四歲）あり。次いで惠心僧都（寬仁元年寂す、七十六歲）あり。惠心は專ら念佛往生の敎へを唱へし人にて、その畫けるは阿彌陀佛及來迎圖を主とせりき。現存遺作の最も信ぜらるゝものは、高野山の聖衆來迎圖（第八圖、三幅あり、巡寺八幡講所有、國寶、僧都廿四歲康保二年の筆と云ふ）にして、金戒光明寺（京都）の山越阿彌陀三尊圖（國寶、圖上の色紙形に書ける文字に正曆五年とあり）等も、亦僧都の畫と傳稱せらる。（この種の古畫少からず、京都淨福寺、禪林寺等）前者は尚前代の顯敎風に類すれど、後者に至りては、本時代に生じたる佛教畫の新典型にして、即ち倭風の佛教畫なり。これより後、淨土教畫は大抵皆この風に作らるゝを常

館藏一卷を存す、その餘摸本三卷あり、第二十一圖は岩崎藏信西獄門の卷の一部分）當麻曼荼羅緣起（二卷、鎌倉光明寺國寶、第二十二圖はその一部分、以上三品住吉慶恩筆と傳稱しき）等ありこれに次いで宗內兼康（建永乃至建暦頃）の書くとおぼしき能惠法師繪詞、（一卷現存、山城太秦廣隆寺國寶）介法橋慶忍（平治物語等を畫きしと傳稱せる慶恩にこの人の誤傳に出でし非實在の人物ならむ）及その子聖衆丸の書ける過去現在因果經、（建長六年作、益田孝藏一卷、內田耕作藏二卷あり）華嚴五十五處繪、（一卷、奈良東大寺國寶）西行物語、（尾州德川侯藏一卷、蜂須賀侯藏一卷あり、第廿三圖は蜂須賀侯藏卷の一部分、藤原經隆筆と傳稱しき、經隆よりも古からむ）北野天神緣起の弘安本（二卷現存、北野神社國寶、土佐行光筆と傳稱しきと雖も、年代合はず、弘安元年の作なり）等あり。既にして、元寇擊攘の元氣は、繪卷物の進運にも一時期を畫せしめ、爾後作者踵を接して輩出せり。姉小路長隆、（文永乃至永仁頃）長章（長隆の子）は竹崎五郎繪詞（蒙古襲來繪詞とも云ふ、二卷、卷末に永仁元年の記あり、帝室御物）を作り、藤原隆相は伊勢新名所繪歌合（一卷現存、伊勢神苑會藏）を作り、法眼淨賀（延文元年寂、八十二歲）は親鸞上人傳繪（全五卷、伊勢高田專修寺に一本あり、永仁三年成る）を作り、六郎兵衛入道蓮行は鑑眞和尚の東征傳（全五卷、大和唐招提寺國寶、永仁六年成る）を書き、法眼圓伊は歡喜光寺（京都）六條道場の一遍聖繪（全十二卷、その中十一卷は歡喜光寺國寶、第七卷は橫濱原富太郎藏、正安元年成る、第廿四圖はその一部分）を書き、高階隆兼（延慶乃至元德頃）は春日明神驗記（全二十卷、帝室御物、延慶二年成る、第廿五圖はその一部分）及石山寺緣起の初三卷（全七卷、近江石山寺國寶）等を書き、藤原經隆は百鬼夜行（御物、正和五年の奧書あり）の摸寫を留め、土佐邦隆、（經隆の弟）土佐吉光の遺作には、法然上人行狀繪圖、（京都知恩院、大和當麻寺に各四十八卷あり、並に國寶、前者は邦隆、吉光等の合作、後者は吉光一筆と傳稱す、正安乃至德治頃成る、第廿六圖は知恩院本の一部分、東京增上寺にも法然上人繪傳二卷あり、亦吉光筆と傳稱す）清淨光寺（相模藤澤道場）の一遍上人繪詞傳（全十卷、清淨光寺國寶、吉光筆と傳稱す、嘉元、德治頃成る、第廿七圖はその一部分）等あり。土佐行長（邦隆の子、元應頃）の遺作には、荏柄天神緣起（三卷、前田侯爵藏、元應元年成る）あり。巨勢家の畫人の繪卷物には、有行、有重の合作に成れる熊野山一遍上人繪傳（嘉元三年畫く、今存せず）及有康又は有家（共に系圖に無し）の筆と傳稱する地藏緣起（一卷、帝室博物館藏）あり。その餘、本時代に成りし繪卷物の現存品尙少からず。（土蜘蛛草子、住吉物語、天狗草子永仁四年成、矢田地藏緣起、競馬行幸、兒觀音緣起等）各〻特色の觀るべきものあり。殊に邦隆、吉光等の勁く銳き筆使ひと圓伊法眼及吉光の一遍繪傳等、配景の山水、樹石巧妙を極めたるとの如きは、その最も顯著なるものにして、隆兼の春日驗記に至りては實に繪卷物進化の極と謂ふべく、精巧典麗殆どこれに及ぶものなきを認む。繪卷物に非ざる倭繪の遺品には、神護寺の山水屏風、（國寶）赤星鐵馬所藏の那智瀑布圖等あり

平安王朝時代に於いても、河成が從者の貌を畫き、弘高が性空聖人の像を寫しゝ如きこと少からず、從ひて遺作なきに非ずと雖も、似繪の大いに發達したるは、實に本時代に在りて、專らこれに長じたる作者も出で來、その鑒賞も頗る行はれしなり。後白河、後堀河兩帝の如きは、殊にこれを好みて、閑暇に供したまひき。（著聞集玉葉に見ゆ）その始めて似繪に名を得たるを藤原隆信、（元久元年卒、六十四歲）信實（隆信の子、文永二年卒、八十九歲）とす。隆信の遺作には平重盛、（第二十九圖）源賴朝、藤原光能の像（山城高雄神護寺國寶）あり。信實の遺作には三十六歌仙（卷物二軸のもの佐竹侯爵藏、第二十九圖はその中の山邊赤人像、又上げ疊の歌仙と稱するもの散じて存せり）あり、藤原爲家（建治元年薨、七十八歲）も時代不同歌合（博物館藏）隨身庭騎（一卷、伯爵德川達孝藏）等の遺作を留め、信實の裔なる僧豪信（建武頃）も遺作に大臣影（二卷、九條公爵藏）等あり。妙法院（京都）に存ずる後白河法皇御像（國寶）等は、本時代に於ける逸名遺作の尤なるものとす。

似繪の大いに行はるゝや、啻に人物のみならずして、牛馬似繪と云ふもの、これに伴ひて始めて發達しき。蓋し武人は駿馬を愛し、公家は駕車に駿牛を好みしが爲なり。されば、藤原良經（後京極攝政、建永元年薨、三十八歲）の

繪（大坂四天王寺に貼葉にせるもの百二葉、帝室博物館に九葉ある等）等あり以て倭繪の古風を見るに足る。

第六章　平家時代（後白河天皇より安德天皇まで）

平家時代の世風は、藤原時代と略同じくして、何事も大かた前代の餘波に屬せりたゞ屛障繪畫の流行は前代に如かずと雖も、繪卷物は益〻行はれ、（後白河天皇の畫かしめたまひし年中行事、著聞集、奥州合戰繪吉記及保元相撲圖十葉、末葉露繪詞同上、玄宗皇帝繪六卷同上等史書に見えたり）寫經の類にては、殊に法華經の裝飾に善美を盡すこと多かりき。平家の嚴島神社に納めしもの（法華經及無量義經、觀普賢經合せて三十二卷、長寛二年乃至仁安二年に成る、第十七圖はその一卷の見返し口繪）及久能寺觀音堂（駿河安倍郡富士見村）の法華經（觀普賢經を合せて十九卷存せり、口繪逸、保延五年乃至永治元年頃成る）の如きは、遺品の尤なるものなり繪卷物の遺品には源氏物語、（前代の隆能の筆と傳稱すれど、恐らくは本時代の作ならむ、尾州德川侯二卷、益田孝一卷を藏す、第十八圖には益田氏藏鈴蟲の卷の一部分）及光長の筆と稱するもの（後に述ぶ）あり、その畫風の特徴には、前代の末より萌して專ら本時代に行はれし引目鉤鼻（目はたゞ細線を描き、鼻は鉤の如くにて小鼻を畫かず、故に言ふ、面相爲に眠れるが如し、嚴島繪扇、前出の扇面法華經下繪、嚴島平家納經及源氏物語の畫皆これに屬せり）の體あり光長の遺作と稱する繪卷物の畫は、別に筆使ひの輭にして而も技の健なる一種の風を爲せり、繪畫の評賞も行はれけるにや、繪難房と云ふ者（畫の失を見出して批難するに長けたり、後白河天皇頃）ありしことなど、著聞集に見ゆ。

この時代の畫家には、巨勢家に宗茂、（前に出づ）益宗、（治承頃）秀茂、兼茂、有宗（繪所長者、元暦頃）あり春日家には隆親、（初名隆成、治承頃）光長（承安頃）あり宅磨家には爲久（壽永、文治頃）ありこの中遺作と稱するものゝ傳はれるは、獨り光長のみ年中行事、（先に言へる後白河天皇の畫かしめたまひしものか、元六十卷ありしが安永の頃燒亡して、今摸本十六卷あり、田中有美これを藏す）伴大納言之繪詞（古繪卷物中最も著名なり、三卷、伯爵酒井忠道藏、第十九圖は上卷の一部分應天門の燒くるを見る群衆の一團）病草子、（名古屋關戸氏藏二卷あり、その餘散逸して存するもの少からず）餓鬼草子、（一卷備前國曹源寺所藏國寶）地獄草子、（益田孝二卷、男爵高橋是清、岡山安住院各一卷を藏す）吉備大臣入唐繪詞、（一卷、伯爵酒井忠道藏）粉川寺縁起、（一卷、紀伊粉川寺藏）彥火々出見尊繪詞（所在不詳）等即ちこれなり

佛教畫も前代に次いで頗る盛なりき。從ひて人車記、山槐記、玉葉、吉記等の古日記に製作の事多く見え、遺品亦少からずと雖も、前代末の物に比して、別に特徴の著きはなし繪佛師業の盛なりしことも前代に讓らずその著れたる者には法眼賴源（永治乃至壽永頃）等ありき。

第七章　鎌倉時代（後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで）

關東の武士天下の政權を掌握せし鎌倉時代は、藤原氏、平氏の頃に反して、何事も華を去り實を尙ぶ世風なりしかば、繪畫にても、寺社の縁起、神佛の靈驗、高僧の傳記及戰爭等の事實を寫せる繪卷物と、人物の似繪（肖像の義）及牛馬似繪の如き、事物の實に就けるもの最も發達し、佛教畫は、淨土宗の弘通に連れて、當麻曼荼羅の摸寫及來迎圖行はれ、禪宗に伴ひて阿羅漢圖起り、又日吉、熊野等諸社祭神の本地尊、（國神を垂迹權現とし、佛教の諸尊をその本地と立てゝ言ふ、その製作の事、多く古日記に見ゆ）及春日曼荼羅（宮曼荼羅、鹿曼荼羅の二種あり、往々現存す）の如き神佛融合の思想より生ぜしもの、竝に普賢十羅刹女、（東京美術學校、遠江大福寺國寶等に在り）清瀧權現（田中伯爵藏品に在り）等の如き邦俗の服裝を爲せる圖像の畫かれしもの多きに至りぬ。

繪卷物はまづ本時代の初めに成れりとおぼしきに、北野天神縁起、（北野神社國寶、根本縁起、承久本と云ふ、承久元年頃の作、全八卷、第二十圖はその一部分）紫式部日記、（秋元子爵藏一卷、蜂須賀侯爵藏一卷、久松子爵藏一卷あり）華嚴縁起、（六卷現在、山城栂尾高山寺國寶、以上三品藤原信實筆と傳稱しき）平治物語、（岩崎男爵藏一卷、松平直亮伯爵藏一卷、米國ボストン美術

に藤原久國、海田相保等あり。久國の作は慕歸繪詞第一、第七の二卷文明十四年成る及眞如堂緣起三卷、大永四年成るあり。相保の作には西行物語五卷ありその餘、作者の名を逸したる遺品には百鬼夜行、京都大德寺眞珠菴國寶、一卷、光信筆と傳稱すなよ竹物語、又鳴門中將物語と云ふ、讃岐金刀比羅神社藏、一卷、行廣筆と傳稱す佛鬼軍、京都十念寺藏、一卷、一休筆と傳稱す福富草子、二卷、京都妙心寺春浦院藏、光信筆と傳稱す東大寺大佛殿緣起二卷現存、奈良東大寺藏、天文五年成る、芝琳賢の作と傳稱す等あり。又繪卷物の變體とも謂ふべきものに、誓願寺緣起、京都誓願寺國寶、海北友雪補畫の一幅と共に三幅あり、文龜頃成りしか聖德太子繪傳大和橘寺國寶、八幅、光信筆と傳稱す、御物四幅等あり繪卷物の各段を上下に重ねたるが如き布圖に成れり。これ等の外、文明乃至天文の頃に成りし諸寺緣起善光寺、星光寺、勸修寺、高瀨寺、勝尾寺、桑實寺、十念寺等等、古逸品の夥しき數は、多くその詞書を書きし三條西實隆公の日記に見ゆ挿畫ある御伽草子の小卷物は。繪卷物流行の末と視るべきものにして、永享の頃より行はれき廣周の畫と傳稱する道成寺繪、一卷、酒井忠興伯爵藏光信の畫と傳稱する鼠草子、狐草子、鶴草子、藤袋草子各一卷等即ちこれなり。

上來各時代に歷叙し來りたる佛敎畫は、即ち純正佛敎畫にして、禮拜若くは觀想の標的たりしものなり。この種の佛敎畫は、殆ど本時代を以てその終末とすべく、爾後の製作は、概ね定型の摸寫に過ぎざるものと爲り、徒らに精巧にして、敢て美術として視るに足らざるもの多し。圖像印畫のこの頃より行はれ初め永享以後、蔭凉軒日錄、實隆公記、蔗軒日錄等に出づたるも、畢竟佛敎畫衰頽の一反映に外ならじ。而して本時代に新に興りたる宋風の謂はゆる道釋人物畫は、專ら壁間の雅賞に供せらるゝものにして、嚴正の意義よりしては佛敎畫と稱すべきに非ざるなり故に次章以下佛敎畫を別叙せずされど、本時代の間は、在來の佛敎畫必しも

跡を絕てるに非ず、將軍家に於いても尊氏はみづから多く地藏尊を畫き、義滿の頃は屢〻種々の修法を行はしめ、その本尊も新に圖繪せしめしものありしなるべく、春日神社には粟田口、芝尊海、觀深等等の繪所あり、興福寺の一乘院、大乘院には巨勢家末流の繪佛師巨勢系圖に出づあり、東寺巨勢行忠、野田國友、祇園社隆昌、隆圓、良圓等に繪所又は繪師職ありて、南都北嶺の寺社に於ける古風の佛敎畫の製作は、尚少からざりけむ然れども傑出せる名家は多く出でざりき。これ蓋し、當時專ら行はれたる禪宗が、純正佛敎畫よりも寧ろ主として宋元風の而も墨畫多きに居る道釋人物を好みしが爲なり。されば最も多く製作せられしは、出山釋迦、三敎吸酸、蒲服文殊、魚籃、水月、騎鯉、蓮舟等の觀音、皆經に無く、觀音の風流化せしもの達磨、布袋乃至爾餘禪祖、列仙等の諸圖にして、僅に純正佛敎畫と目すべきは、禪宗の般若經を依用するよりして行はれたる十六善神圖、樂道傳授に由りて行はれたる辯才天妙音天圖、歌道の法樂に由りて行はれたる北野天神像、佛敎畫とすることは不妥なれど便宜こゝに攝す、殊に最も流行せしは、宋に影現して無準和尚に參禪せしと云ふ傳說より出でし渡宋天神なり不動尊多き木筆畫梵字を書く木筆を用ゐて畫く、初め密僧の墨戲に出でしかあるに過ぎず、作者の勝れたるは、法印良詮、建仁寺に十六羅漢あり、南北朝初か、李龍眠風龍湫妙澤、專ら不動尊を畫けり、現存品少からず、嘉慶二年寂、八十一歲及明兆東福寺の殿司たりしが故に兆殿司と稱す、東福寺に五百羅漢五十幅、同草本四十七幅、涅槃圖大幅、祖師像等あり、畫風は宋元風に稍和風を帶びたり、永享三年寂、八十歲、第三十五圖は東福寺藏聖一國師像等あり。肖像畫は、前代の似繪の遺風尚本時代にもありて、遺品も少からず。後醍醐天皇御像第三十六圖、京都大德寺國寶、相模清淨光寺にもその灌頂御影ありの如きは即ちその一なり然れども、この種のものよりも最も盛に行はれしを、僧侶の肖像とす。當時これを頂相と呼べりこは初め支那より傳來せる禪僧像

畫馬と同基通（普賢寺攝政、天福元年薨、七十四歳）の畫牛とは、竝に當時に名高く、法眼任禪（叡山座主の坊官、乾元頃）同幸增は牛馬似繪の妙技を後二條天皇の御前に揮ひ、（吉槐記、續史愚抄に見ゆ）藤原實忠（從一位、内大臣、貞和三年薨、四十四歳）の遺作には、駿牛繪詞（詞は群書類從に在り）の零本（その一圖博物館に在り、筑紫牛小額）にあり。

佛敎畫の本時代にも製作の盛なりしさまは、古日記類に見え、現存の遺作少からざるにて知らる。而してその畫風は、從來の顯敎、密敎の差別渾和し、新に宋風の影響を受けて發達し出でたる宅磨派專ら行はれき。この派の作者は本時代の初めに爲辰（文治頃）爲行（寛喜頃）あり。次で法眼勝賀（建仁、元久頃）あり。勝賀の遺作には東寺の十二天（國寶、第三十圖はその中の月天、神護寺にも近江坂本來迎寺にも勝賀筆と稱する十二天あれども東寺のものとは畫風異なり）ありて、その肥瘦ある用筆、この派の特徵著し。勝賀に次いで法眼榮賀（正和、乾元頃）あり。その畫ける人丸像（赤星鐵馬藏、第卅一圖、印識あり、京都南禪寺國寶の大明國師像も榮賀の筆と傳稱す）等今に存す。榮賀の後、宅磨家に了尊（嘉曆二年歿、六十三歳）式部大夫（元德二年歿）遠江法印朝勝（元德四年歿）法眼淨宏（南北朝）等ありと雖も、勝賀、榮賀の外、その名大いに著れざりき。

この時代の巨勢家は、多く南都一乘院及大乘院の繪師たり。その中僅に源慶、源尊（父子）が建保の頃、當麻曼荼羅を寫しゝことの稍著きあるに過ぎず。

春日繪所（奈良興福寺、春日神社の畫事を勤む）は初め住吉家（慶忍等ならむ）これを職とし、次いで宅磨家これを襲ひしものゝ如し。これ等の世家の外、繪佛師甚多く、法眼尊智（建永、貞應頃）法印良賀（建曆、建保頃）等稍著れたり。逸名の遺作も從ひて少からず。

第八章　足利時代（後醍醐天皇より正親町天皇まで）の上

足利時代も繪卷物は多く作られき。然れども、その畫品は漸く下りて復前代に及ばずなりぬ。初め飛驒守惟久あり。八幡太郎繪詞（又後三年軍記と云ふ、貞和三年成る、元六卷ありしが、今下半の三卷を存す、池田侯爵藏、第卅二圖は第六卷の一部分）を畫けり。本時代繪卷物遺品の白眉とす。はらひさん〳〵と名づくる繪卷物（一卷、尾州德川家藏）も惟久の遺作と傳稱す。正平の頃、藤原隆盛、隆章、隆昌あり慕歸（ぼき）繪詞（十卷、正平七年成る、中二卷は後補、京都西本願寺國寶）等を畫けり。これに次いで巨勢行忠等の合作に成れる弘法大師行狀記（十二卷、康曆元年成る）東寺國寶、土佐光顯（南北朝）の筆と傳稱する直幹申文繪詞（一卷、酒井忠興伯爵藏）土佐行光（貞治頃）の弘法大師行狀圖畫（六卷、高野山地藏院藏）土佐光重（行光の子、明德頃）の舞樂圖（散手圖一幀、片野邑平藏、款印あり）等あり。八幡太郎繪詞に次いで著名なる清涼寺（京都嵯峨）の融通念佛緣起（國寶、二卷、明德元年成る、第三十三圖に隆光の畫ける一部分）は春日行秀、土佐光國、粟田口隆光、六角寂濟（じゃくさい）、大夫法眼永春の合作に成れり。この中、隆光最も著る。その遺作と傳稱するものに、石山寺緣起第五卷（石山寺國寶）市屋道場繪詞と稱する一遍上人繪傳（現存二卷、男爵高橋是清藏）あり。永享前後の繪卷物の玩賞頗る盛なりしさまと、その多數の古逸品とは、看聞日記等に詳なり。光重、行秀の後、土佐家には光周、光弘、光季、行盛、廣周等ありて、光弘、廣周は繪所預たりき。廣周の嗣光信（大永五年卒、九十二歳）に至りてその名頗る著る。遺作永觀堂（京都）の融通念佛緣起（二卷、國寶、寛正四年三十歳作）天神緣起文龜本（三卷、北野神社國寶、文龜三年七十二歳作）及清水寺緣起（三卷、永正十四年八十四歳の作、博物館藏、第三十四圖はその一部分）等あり。光信の嗣光茂の遺作には當麻寺緣起（三卷、大和當麻寺藏、享祿四年成る）あり。その子光元は永祿十二年の亂に戰死（四十歳）せり。土佐家以外の畫人

菓を畫けり。眞能の子眞藝（藝阿彌、永享三年乃至文明頃）眞藝の子眞相（相阿彌、文明、大永頃、第四十二圖はその作山水圖障子畫）あり能相二家の山水は、柔雅の筆墨、爾餘の諸家と頗る格調を異にして、後世の謂はゆる南宗畫の系統に屬せり。眞藝の門に祥啓（啓書記、文明、明應頃、第四十三圖はその作達磨圖）あり。雪舟は曾て明に入り、李在、張有聲等に學び、宋元の粹を一身に集めて、殆ど古今に獨歩せり、（第四十四圖は雪舟作山水圖）雪舟の門下秋月（第四十五圖はその作山水圖）最も著る。雪村（天文、永祿頃、第四十六圖はその雪景山水圖）も雪舟に私淑して、往々逸氣奔逸の作を出せり。正信は即ち狩野家の始祖なり。山水、人物を兼ね善くして、眞に縱橫の行家（くろうと）たり。（第四十七圖はその作周茂叔愛蓮圖）その子元信（永祿二年歿、八十四歳）に至りては、倭繪を併せ學び、家風の幅員更に廣きことを致せり。（第四十八圖は元信筆豐干禪師圖）元信の弟之信（天正三年歿、六十三歳）亦別趣あり。（第四十九圖は之信筆耕作圖障子畫）

第十章　豐臣時代（天正乃至慶長）

この時代は僅に三十年間に過ぎずと雖も、秀吉が英雄豪華の氣風は、書院造りの建築をして極めて華美ならしめ、金壁障屛の諸作、從ひて濃彩絢爛を極めたるものを生せり。これをその特徴とす即ち狩野家に元信の孫永徳（天正十八年歿、四十八歳）ありて、秀吉の盛に營築する城第に畫く。その畫規模雄大にして、設色頗る華美なりき墨畫と雖も適勁にして覇氣を帶びたるを見る。（第五十圖は永德筆琴碁書畫圖障子畫の一部分）門下に海北友松（元和元年歿、八十三歳、海北派の祖）及狩野山樂（寛永十二年歿、七十七歳）あり。友松は筆意永徳よりも巧曲を加へたれど、設色の華美は相似たり（第五十一圖は友松筆文王呂尙圖屛風畫）後宋人梁楷の風に倣ひて、別に減筆描の人物（時に袋畫と云ひき）を畫けり。山樂は墨畫永徳に類し、（第五十二圖は山樂筆鷲鳥圖屛風畫）又能く、國俗の人物を畫きて、後の浮世繪の濫觴を爲しぬ。

雪舟の末流は雲谷と長谷川との二派に分れき雲谷の祖を等顏とし、長谷川の祖を等伯（慶長十五年歿、七十二歳）とす。等顏は雪舟を精巧化したるが如く、（第五十三圖は等顏筆竹林七賢圖屛風一雙の一帖）等伯は牧溪に健拔を加へたるが如し（第五十四圖は等伯筆枯木猿猴圖障子畫の一部分）二家の後漸く振はず。

前代に行はれし鷹の畫は、土岐頼世（應永四年卒）の後、本時代に入りて土岐洞文（天正十年卒、八十一歳、第五十五圖はその作巣鷹圖）あり。曾我家の後に直庵（慶長中）あり。直庵に至りては、墨鷹の外、殆ど狩野派と同化しぬ（第五十六圖は直庵筆花鳥圖屛風畫、後二直庵等あり）

第十一章　徳川時代（元和乃至慶應）

徳川時代は文化の庶民に普及せるに伴ひ、繪畫も渾融進化して諸派競ひ起り、百花誠に爛熳たりき。今狩野を初めとし、流派の別に從ひてこれを略叙せむに、永德の子光信（慶長十三年歿、四十四歳）の門に狩野興以（一に興意に作る、寛永十三年歿、第五十七圖はその作と稱する二條離宮の障子畫）あり山樂に學びて輕淡の墨戲に長せし松花堂昭乘（寛永十六年寂、五十六歳、第五十八圖はその作十六羅漢圖）あり友松の子に海北友雪（寛永頃、第五十九圖はその作山水樓閣圖）あり。山樂の子に山雪（慶安四年歿、六十三歳、第六十圖はその作蜀道圖）あり家々各々特長の趣致を有せり。これを本時代初に於ける斯派の名流とす。これに次いで、興以の薫陶の下に光信の弟孝信の子守信、（探幽、延寶二年歿、七十三歳、第六十一圖はその名古屋離宮壁畫）尙信、（探幽の弟、慶安三年歿、四十四歳、第六十二圖はその作二條離宮杉戸畫）及尙信の子常信（正德三年歿、七十八歳、第六十三圖はその作桐鳳凰圖屛風畫）出づ。探幽に至りて狩野家の畫風又一變せり。これよりして後は、閥閲世襲を重ずる上下の世風、その子孫をして家風

（聖一國師請來無準禪師像等あり）にその端を啓きしものとおぼしく、その製作大いに禪林に流行せり書風は似繪風と同じからずして、明兆風等に類せるもの多しその題賛は禪僧の詩文集に多く、遺品は竝に京湘五山等の諸寺に存す前出聖一國師像の如きは、即ちその一好例なり牛馬似繪は本時代に著からずその遺風に屬するもの、繋馬屛風及鷹の書等あり

第二編　近世

第九章　足利時代の下

足利時代は我が國の古代史と近世史との過渡期なり應仁の兵火は延暦以降の遺物を烏有にし、爾來土寇の暴掠、群雄の爭奪は、室町幕府の衰運と相待ちて、帝室を式微の極に陷らしめ、古代文化のゆかしき種子は、殆どこゝに蕩盡せられきと謂ふも過言に非ず。されば文學、（近世美學は五山文學より來り、戯曲は謠曲より來れりと謂ふべし）演藝（劇は能より出でゝ發展せり）と共に、近世繪畫の系統は足利時代に始まりぬ。この系統の源は、鎌倉時代以來、我が國に來化せる宋元禪僧及遊學歸朝せる我が禪僧（道元、道隆、祖元、子曇、一山等）の彼の土に行はれし墨戯に倣ひて、水墨を揮洒せしに出で、本時代に入りては、足利家の遣明船の往復及その他の貿易の爲に、支那畫の輸入せられしもの頗る多く、義滿、義政等の好事に提撕せられ、これを贈答に用ゐること、これを鑒賞することゝは、禪宗及點茶と共に盛に行はれ、宋元風繪畫をして、在來の倭繪に代りて、獨り忽ち發展の運を開かしめたり

當時輸入せられし支那畫は現存品尙少からず、その贈答及鑒賞の事は、竝に古日記、詩文集等に詳なり繪畫の題賛も、在來倭繪の色紙形を用ゐしに同じからず亦支那風に倣ひて、圖上の空位に直ちにこれを書することゝ爲り、而も一圖に諸家の詩文を題すること行はれぬ當時これを詩軸と呼びきされば題畫の詩文は、五山の集中最も多し。畫者、題者の印識を用ゐることの必然の風と爲り、佛教畫に非ざる繪畫を挂幅（掛物）として壁間に展觀することも亦共に本時代に始まれり挂幅展觀の風は、書院造りの建築及茶室の發達に伴ひて行はれつ。當時の謂はゆる座敷飾りの主なるものなり。床之間の出で來し後は專らこれに懸くされば、その展觀の形式及作法も、當時の書仙傳抄、君臺觀左右帳記、御飾記等に於いて初めてこれを見る皆これ近世式の本時代を以て濫觴とせることを徵するに足れりと謂ふべし

近世繪畫の濫觴を爲せる宋元風繪畫發展の迹を尋ぬるに、初めまづ可翁、（貞和元年寂、第三十七圖はその作寒山圖）梵芳、（玉畹、應永頃、墨蘭に長ぜり）墨一之（明兆に學ぶと云ふ、墨畫道釋を畫けり）等あり。尋いで如拙、（應永、文安頃、第三十八圖はその作瓢鮎圖）ありその門に周文（永享、享德頃、第三十九圖山水圖は即ちその作）あり。共に南宋の院體を學びて專ら墨畫を作れり。周文の下名手輩出す即ち曾我蛇足、（文明十五年歿）宗湛、（又宗丹に作る、寬正、應仁頃）眞能、（能阿彌、永享、文明頃）雪舟（永正三年寂、八十七歲）及狩野正信（天文十九年歿、九十七歲）等にして、謂はゆる東山時代（文明前後）の盛況を現出せり。蛇足は山水の外、道釋人物（第四十圖はその釋迦苦行圖）別に一家の格を成し、宗湛は山水（第四十一圖は宗湛作と稱する春景山水圖）に周文の箕裘を紹ぎ、又能く花卉蔬

畫は丹繪の後、奥村政信以來漆繪あり。又洋畫の法を取りて浮繪を工夫しつ、鈴木春信に至りて始めて錦繪出づ。錦繪は爾來益々その美を加へ、近年に至るまで久しく江戸の名物たりき。

元祿、享保の際、木下順庵、新井白石、祇園南海等輩出し、漢學は彝倫政道を説くに局せずして、詩文の流行を致せしに伴ひ、享保以降伊孚九（享保五年以來數回）、沈南蘋（在長崎享保十六乃至十八年）、費漢源（享保十九年）、方西園（安永九年）、張秋穀（天明中）江稼園（文化中）等相踵いで長崎に來り、專ら南宗の山水、徐氏體の花鳥を作り、支那畫も多く輸入せられしかば、明清の畫風始めて我が國に行はる。これより先、長崎に渡邊秀石（寶永四年歿、六十九歲）等が僧逸然（正保二年來朝、寛文八年寂）の禪餘の畫を學べるあり。柳澤里恭（寶曆八年歿、五十三歲）まづこれに倣ひ、巧麗の設色もて花鳥、人物を畫けり。既にして池野大雅（安永五年歿、五十四歲、第八十四圖はその作白雲紅樹圖）及與謝蕪村（天明三年歿、六十八歲、第八十五圖はその作柳溪歸牧圖）あり。大雅は清人蕭尺木を慕ひて專ら水墨の文人畫を作り、蕪村は明畫を學びて趣味橫溢せる山水を畫き、以て竝に一世に鳴る。これより後、明清畫風の盛運旭日の如く、初めは多く關西に行はれしが、後漸く江戸に及ぼし、文化、文政以降、名手四方に崛起して、以て天下を風靡しぬ。十時梅厓（文化元年歿、七十二歲）、釧雲泉（文化八年歿、五十三歲）、金子金陵（文化十四年歿）野呂介石（文政十一年歿、八十二歲）、田能村竹田（天保六年歿、六十歲、第八十六圖はその作松溪聽泉圖）立原杏所（天保十一年歿、五十三歲）谷文晁（天保十二年歿、七十八歲、第八十七圖はその作谿山疊嶂圖）渡邊華山（天保十二年歿、四十九歲、第八十八圖はその作邯鄲炊夢圖）高久靄崖（天保十四年歿、四十八歲）浦上春琴（弘化三年歿、六十八歲）岡田半江（弘化三年歿、六十五歲、第八十九圖はその作山水圖）中林竹洞（嘉永六年歿、八十四歲、第九十圖はその作竹石錦雞圖）椿椿山（安政元年歿、五十四歲、第九十一圖はその作花鳥圖）山本梅逸（安政四年歿、七十五歲、第九十二圖はその作秋景山水圖）岡本秋暉（文久二年歿、七十八歲）小田百谷（文久二年歿、八十歲）貫名海屋（文久三年歿、八十六歲）福田半香（元治元年歿、六十一歲）木下逸雲（慶應二年歿、六十七歲）日根對山（明治二年歿、五十七歲）僧鐵翁（明治四年歿、八十一歲）等即ちこれなり。就中竹田、華山の二家は東西の雙絕と稱すべく、文晁は南北合流に縱橫の技を揮ひ、椿山は蓄筆の溫藉を以て勝れ、梅逸は健筆殆ご一時に冠たり。

圓山派の起れるも亦眀清畫に待つ所ありしなり。殊にその寫生風の花鳥は、畢竟徐氏體の一變化に出でしと謂ふべし。應擧（寛政七年歿、六十三歲、第九十三圖はその作鯉魚圖）一たび出でゝ、謂はゆる京派の輕巧は、實に一世を驚動し、爾來盛に行はれて以て今に及べり。門下多士濟々たる中、源琦（寛政九年歿、四十八歲、第九十四圖はその作潘妃圖）の巧麗なる美人、長澤蘆雪（寛政十一年歿、四十五歲、第九十五圖はその遺作嚴島神社額山姥圖）の縱橫の才筆、最も勝れたり。これに次ぐを渡邊南岳（文化十年歿、四十七歲）山口素絢（文政元年歿、六十歲）森徹山（天保十二年歿）等とす。僧月僊（文化六年寂、八十九歲）別調を人物畫に出し、吳春（文化八年歿、六十歲、第九十六圖はその作溪樓讀書圖）は初め蕪村を學び、後應擧を慕ひて別に四條派を成せり。その弟松村景文（天保十四年歿、六十五歲）及門人岡本豐彥（弘化二年歿、六十八歲、第九十七圖はその作網魚圖）等の後、圓山派との畫風の差別漸く明ならず。

以上列叙せる諸派の外、伊藤若冲（寛政十二年歿、八十五歲、第九十八圖はその作梅雞圖）の裝飾美に富める花鳥、森狙仙（文政四年歿、七十五歲、第九十九圖はその作群猿圖）の猿等は、各々一種の特長を肆にせり。その餘原、岸の二流あり原家は在中（天保八年歿、八十九歲）に起り、岸家は岸駒（天保九年歿、九十歲、第百圖はその作孔雀圖）に起れり在中の後在明（弘化元年歿、六十七歲）在照等あり。岸駒の後岸良（嘉永五年歿、五十五歲）連山（安政六年歿）岸岱（慶應元年歿、八十一歲）等ありき。

墨守、陳迹摹倣の弊に陷らしめ、偷安を世祿に貪りて、再たび有爲の作者を出でざらしめたり。されど貞信、光信の子、元和九年歿、二十七歲安信、貞信の養子、尙信の弟貞享二年歿、七十三歲の中橋家、探幽の鍛冶橋家、尙信、常信の木挽町家、及常信の次子岑信、寶永五年歿、四十七歲の濱町家は代々幕府の畫師と爲り、門下のこれより出でたる者諸侯に聘せられて、又その畫員と爲り、狩野家の勢力は殆ど天下を風靡しぬ。狩野家門人の中、名手と稱すべきは、久隅守景、探幽門、元祿末歿か、第六十四圖にその作猿猴捉月圖と英一蝶安信に學べり、享保九年歿、七十三歲、第六十五圖はその作蟬丸圖とのみ。守景はその技寧ろ探幽に勝り、本時代狩野派中の白眉と稱するも過褒に非ず。一蝶の作は滑稽畫及邦俗の人物多し。故を以て或はこれを浮世繪に屬すその餘曾我派の末と稱する者に曾我蕭白天明三年歿、五十四歲、第六十六圖あり。資性の猖狂その畫に現れたるもの多し。

土佐家は光信の後久しく衰へしが、光則寛永十五年歿、五十六歲の子光起元祿四年卒、七十五歲に至りて、再たび帝室の繪所たり。然れども光起は支那畫乃至狩野派を折衷して、舊來の家風を株守せざりき。第六十七圖光起筆桐鳳圖は狩野風に似たる一例光則の弟廣通如慶、寛文八年歿、七十二歲、第六十八圖はその作宇治橋姬物語繪卷の一部分別に住吉家を起し、その子廣澄具慶、寛永二年歿、七十五歲、第六十九圖はその作洛中洛外圖卷の一部分江戸に徵されて幕府の畫師たり。共にたゞ家風を傳へたるに過ぎず。かくて後、久しく名手の出づる者なかりしが、近古に至り、田中訥言、文政六年歿、第七十圖はその作養老瀧圖浮田一蕙、安政六年歿、六十五歲、第七十一圖はその作婚怪草子繪卷の一部分岡田爲恭文久三年歿、四十餘歲、第七十二圖はその作十二月繪卷の一部分等相踵いで出で、古代の繪卷物を研究して、土佐派の復古を試みき。

裝飾畫とも謂ふべき一派は、本阿彌光悅寛永十四年歿、八十二歲、第七十三圖はその作蔦兎圖扇畫の書の下繪に始まりぬと謂ふべし。蓋し古代の卷物、冊子又は色紙等の下繪に倣ひしに出でたるならむ。野村宗達俵屋、寛永頃、第七十四圖は、光悅が書きし卷物に宗達が畫きし下繪に至りては、下繪に用ゐずして裝飾的の美に富める一種の繪畫をも作れり。緒方光琳享保元年歿、五十九歲、第七十五圖はその雜畫は、この系統より出でゝこれを大成せる者にして、遒雅の作風和漢古今の格外に超越せり。染織、模陶等の工藝に應用すべきもの、この右に出づるを見ず。光琳の後、その弟緒方乾山、俵屋宗理、渡邊始興、立林何帠等ありと雖も、大いに著れしを酒井抱一文政十一年歿、六十八歲、第七十六圖はその作四季花鳥圖卷の一部分とす。されど抱一に至りては、圓山派の寫生風加はりて、遒氣較〻薄れたり。

浮世繪は先に述べし山樂の戲筆等ありきと雖も、その專門を以て家を成しゝは、岩佐勝以又兵衞、慶安三年歿、七十三歲、第七十七圖はその作武藏川越東照宮卅六歌仙の一齋宮女御像の遺なり。菱川師宣元祿七年歿、第七十八圖はその遺作を集めたる畫卷の一部分に至り、浮世繪の旗幟始めて明にして、印行の圖畫に丹繪あり。爾來演劇及俗文學の發達變遷と相伴ひて、斯道頗る隆興す。師宣の後、懷月堂、享保頃、安度等鳥居清信、享保十四年歿、六十六歲西川祐信、寶曆元年歿、八十一歲、第七十九圖はその作水邊美人圖宮川長春、寶曆二年歿、七十一歲、第八十圖はその遺作畫卷中の觀舞圖西村重長、寶曆五年歿、六十餘歲奧村政信、明和五年歿、七十九歲鈴木春信、明和七年歿、五十三歲月岡雪鼎、天明六年歿、七十二歲磯田湖龍齋、安永天明頃勝川春章、寛政四年歿、六十七歲、第八十一圖はその作美人讀書圖喜多川歌麿、文化二年歿、五十三歲歌川豐春、文化十一年歿、七十八歲鳥居清長、文化十二年歿、六十四歲北尾重政、文政二年歿、八十一歲窪田俊滿、文政三年歿、六十四歲歌川豐國、文政八年歿、五十七歲同豐廣、文政十一年歿、五十六歲細田榮之、文政十二年歿等あり。各派の妙手踵を接して出で、家々各〻特色ありて、以て專ら俳優、婦女等の風俗を畫けり。葛飾北齋嘉永二年歿、九十歲、第八十二圖はその作汐干狩圖に至りては、支那畫を折衷して別に一派を成し、安藤廣重安政五年歿、六十二歲、第八十三圖はその作大名道中圖は專ら景色を畫き、並に異彩を浮世繪に添へたり。印

玉蟲厨子臺座繪

板面密陀繪　厨子全體高七尺五寸

大和國　法隆寺藏

帝室御物 聖德太子御像

紙本著色 縱三尺三寸五分 橫一尺七寸五分

金堂壁畫藥師刹土圖

著色　縱一丈一尺七寸　橫八尺三寸六分

大和　法隆寺藏

正倉院御物　鳥毛立女屏風畫一扇

紙本面手著色其餘墨畫　縱四尺五寸一分　橫一尺八寸七分

吉祥天像

麻布著色　縦一尺七寸五分　横一尺五分

大和　藥師寺藏

龍猛菩薩像　弘法大師筆

絹本著色　縦七尺一分　横四尺九寸七分

京都　教王護國寺藏

鳳凰堂壁畫　宅磨爲成筆

板面著色　縱一丈三尺　橫一丈一尺

山城國宇治　平等院藏

聖衆來迎圖　惠心僧都筆　絹本著色　縱六尺九寸三分　橫六尺九寸五分

紀伊國高野山巡寺八幡講藏

戲畫卷　鳥羽僧正筆　紙本墨畫　縱幅一尺　山城　高山寺藏

志貴山緣起繪卷　鳥羽僧正筆　紙本淡彩　縱幅一尺四分　大和　朝護孫子寺藏

慈恩大師像

絹本著色　縱五尺三寸二分　横四尺三寸八分

大和國　藥師寺藏

觀自在大勢至圖

絹本著色　縱六尺三分　横五尺七寸五分

大和　法華寺藏

釋迦牟尼佛再生說法圖

絹本著色 縱五尺二寸六分 橫七尺五寸五分

山城 長法寺藏

普賢菩薩像

絹本著色　縦三尺二寸七分　横二尺四寸七分

東京帝室博物館藏

孔雀明王像

絹本著色　縱四尺八寸　横三尺二寸

横濱　原富太郎君藏

山水屛風畫二扇

絹本著色　全體縱四尺六寸五分　橫八尺

京都　教王護國寺藏

妙法蓮華經勸持品第十三
爾時藥王菩薩摩訶薩及大樂說菩薩摩訶
薩與二萬菩薩眷屬倶皆於佛前作是誓言
唯願世尊不以爲慮我等於佛滅後當奉持
讀誦說此經典後惡世衆生善根轉少多增
上慢貪利供養增不善根遠離解脫雖難可
教化我等當起大忍力讀誦此經持說書寫
種種供養不惜身命爾時衆中五百阿羅漢
得受記者白佛言世尊我等亦自誓願於異
國土廣說此經復有學無學八千人得受記

經卷口繪　紙本著色　縱幅八寸六分　安藝　嚴島神社藏

源氏物語繪卷　紙本著色　縦幅七寸二分　東京　益田孝君藏

伴大納言繪詞　土佐光長筆　紙本著色　縦幅一尺四分　伯爵　酒井忠道君藏

北野天神緣起繪卷

紙本著色　縱幅一尺七寸

京都　北野神社藏

平治物語繪卷　傳住吉慶恩筆　紙本著色　縱幅一尺四寸　男爵岩崎小彌太君藏

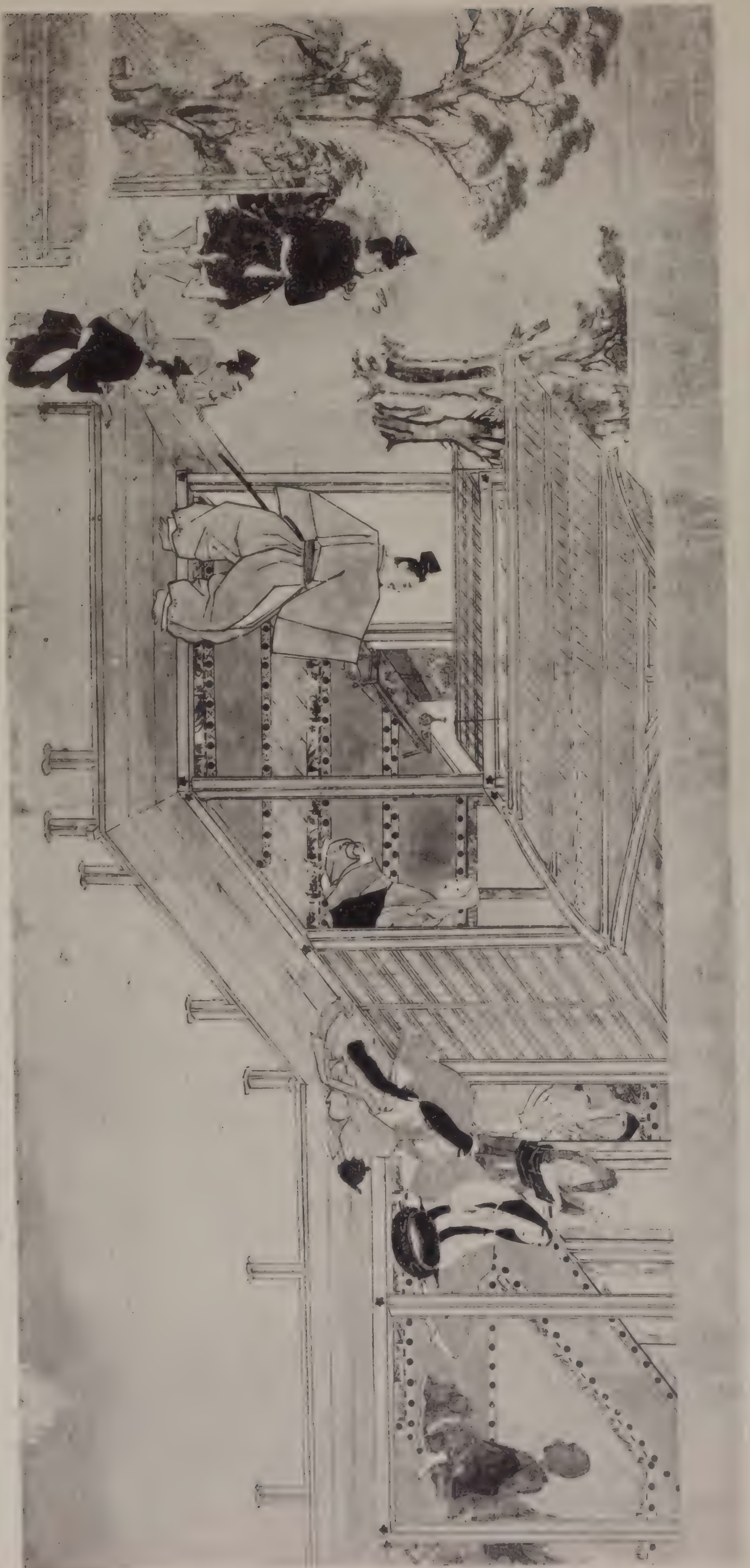
當麻曼荼羅縁起繪卷　紙本著色　縦幅一尺六寸　相模國　光明寺藏

西行物語繪卷　紙本淡彩　縱幅一尺五分　侯爵蜂須賀茂韶君藏

一遍聖繪　法眼圓伊筆　絹本著色　縱幅一尺二寸五分　京都　歡喜光寺

帝室御物　春日明神驗記　高階隆兼筆　絹本著色　縦幅一尺三寸五分

法然上人行狀繪卷 傳土佐吉光筆 紙本著色 縱幅一尺八分 京都 知恩院藏

一遍上人繪詞傳　土佐吉光筆　紙本著色　縱幅一尺一寸一分　相模　清淨光寺藏

平重盛像　藤原隆信筆

絹本著色　縱四尺六寸五分　橫三尺七寸

山城　神護寺藏

山邊赤人像　藤原信實筆

紙本著色　縦一尺一寸八分

侯爵佐竹義生君藏

月天圖　宅磨勝賀筆

絹本著色　縱四尺三寸一分　横一尺三寸九分

京都　教王護國寺藏

柿本人丸像　宅磨榮賀筆

絹本著色　縱二尺八寸　橫一尺三寸七分

東京　赤星鐵馬君藏

八幡太郎繪卷　飛驒守惟久筆　紙本著色　縱幅一尺五寸五厘　侯爵池田仲博君藏

融通念佛縁起繪巻　栗田口隆光筆　紙本著色　縱幅一尺一寸六分　山城國　清凉寺藏

清水寺縁起繪卷　土佐光信筆　縱幅一尺一寸一分五厘　東京帝室博物館藏

聖一國師像　明兆筆

紙本著色　縱八尺三寸八分　横四尺二寸

京都　東福寺藏

後醍醐天皇御影

絹本著色　縱四尺三寸四分　横二尺五寸六分

京都　大德寺藏

寒山圖　可翁筆

紙本墨畫　縱三尺二寸五分　横一尺一寸

男爵郷純造君藏

瓢鮎圖　如拙筆　紙本淡彩　縦二尺六寸八分五厘　横二尺五寸一分　京都　退藏院藏

山水圖　周文筆

紙本墨畫　縱三尺五寸七分　橫一尺八分

侯爵　蜂須賀茂韶君藏

釋迦苦行圖　曾我蛇足筆

紙本淡彩　縱三尺八寸八分　橫一尺七寸六分

京都　眞珠庵藏

春景山水圖　傳小栗宗湛筆

紙本墨畫　縱二尺七寸　橫一尺五分

伯爵伊達宗基君藏

山水圖襖畫　中尾眞相筆

紙本墨畫　縱五尺八寸六分　橫四尺六寸九分

京都　大仙院藏

達磨大師像　祥啓筆

紙本墨畫　縱三尺八分　横一尺五寸

京都　南禪寺藏

夏景山水圖　雪舟筆

紙本墨畫　縦一尺五寸三分　横九寸七分

京都　曼殊院藏

山水圖　秋月筆

紙本墨畫　縱五尺　横一尺三寸

男爵　伊達宗曜君藏

冬景山水圖　雪村筆

紙本墨畫　縱三尺四寸四分　橫一尺三寸三分

東京帝室博物館藏

周茂叔愛蓮圖　狩野正信筆

紙本淡彩　縱二尺八寸橫一尺一寸

伯爵伊達宗基君藏

豐干禪師圖　狩野元信筆　紙本墨畫　縱四尺六寸六分　横二尺三寸二分　東京　赤星鐵馬君藏

耕作圖　狩野之信筆

紙本淡彩　竪五尺八寸六分　横六尺

京都　大仙院藏

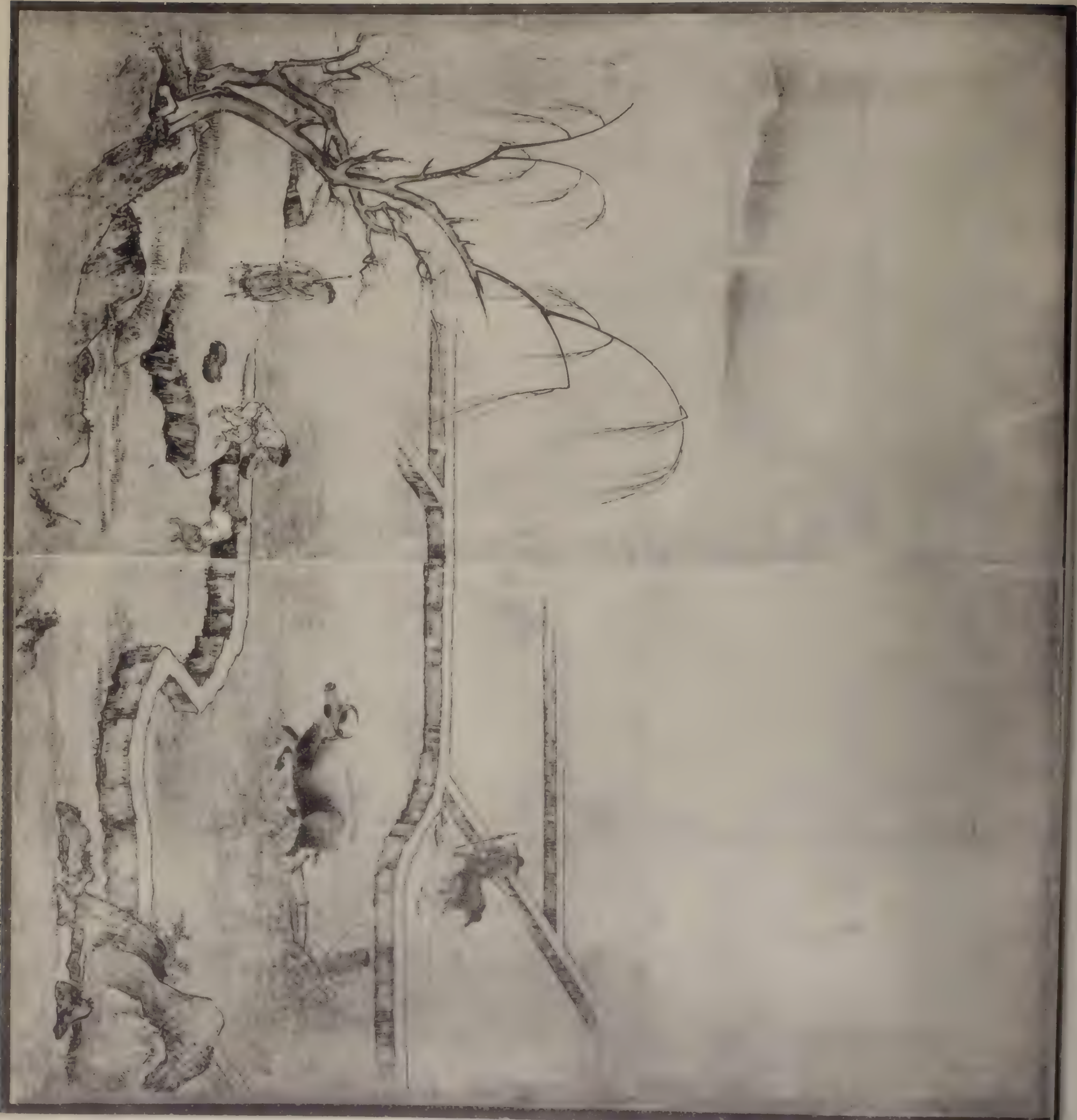
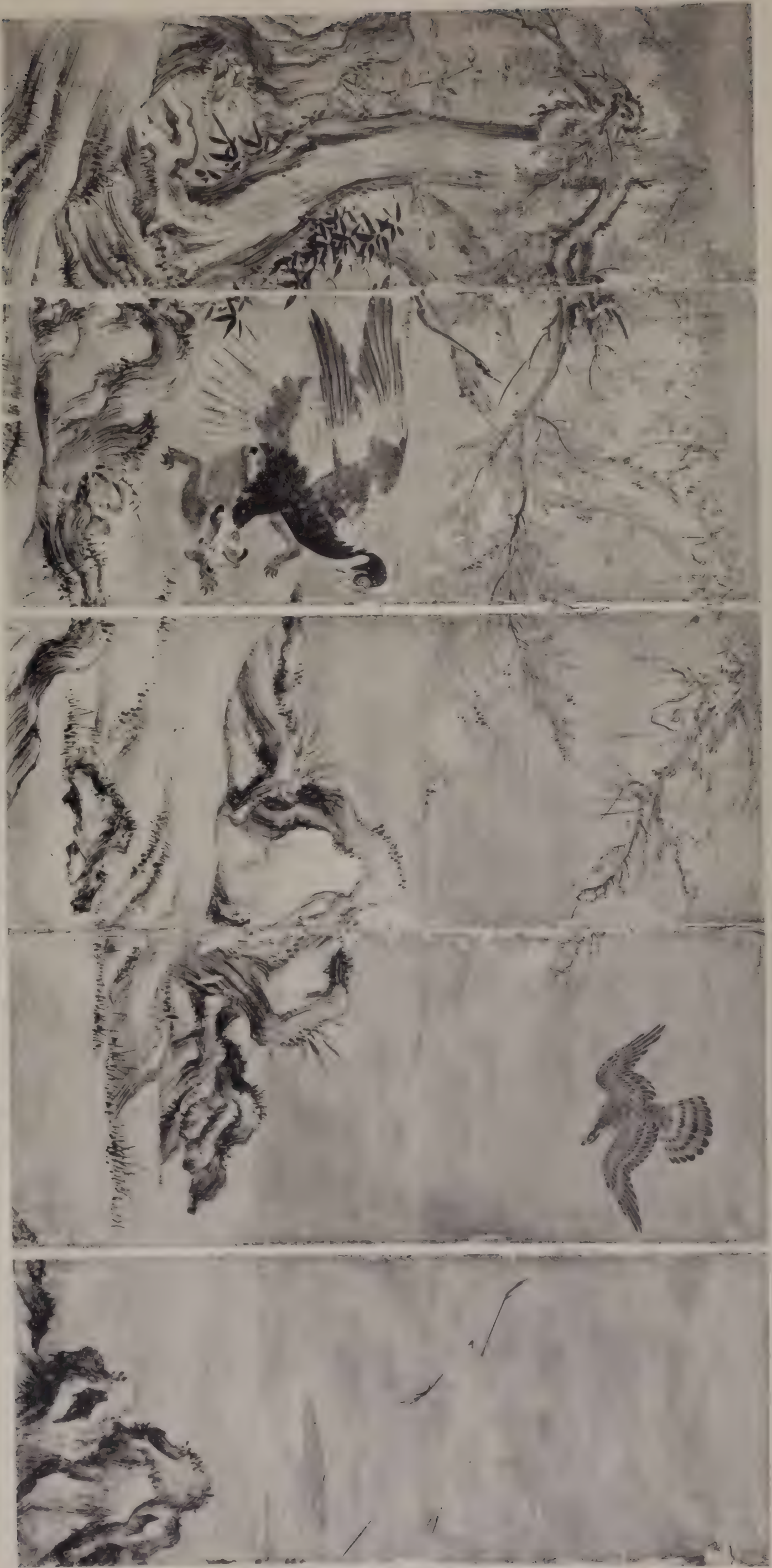
水亭博棋圖襖畫　狩野永德筆

紙本墨畫　縱五尺九寸　橫四尺七寸二分

京都　聚光院藏

文王呂尚圖屛風　海北友松筆　紙本金碧　縦五尺八寸六分　横一丈一尺四寸六分　京都　妙心寺藏

鷲猿圖屏風畫　狩野山樂筆　絹本著色　縱五尺五分　橫一丈二尺八分　京都　西本願寺藏

竹林七賢圖屏風　紙本墨畫　縱五尺一寸七分　横一丈一尺九寸　侯爵細川護成君藏

枯木猿猴圖　長谷川等伯筆

紙本墨畫　縱五尺一寸二分　橫三尺七寸五分

京都　龍泉庵藏

巣鷹圖　土岐洞文筆

紙本墨畫　縱三尺九分　横一尺六寸二分

安藝國廣島　男爵淺野忠純君藏

花鳥圖屏風　曾我直庵筆　縱四尺二寸五分　横一丈二尺六寸五分　紀伊國高野山　寶龜院藏

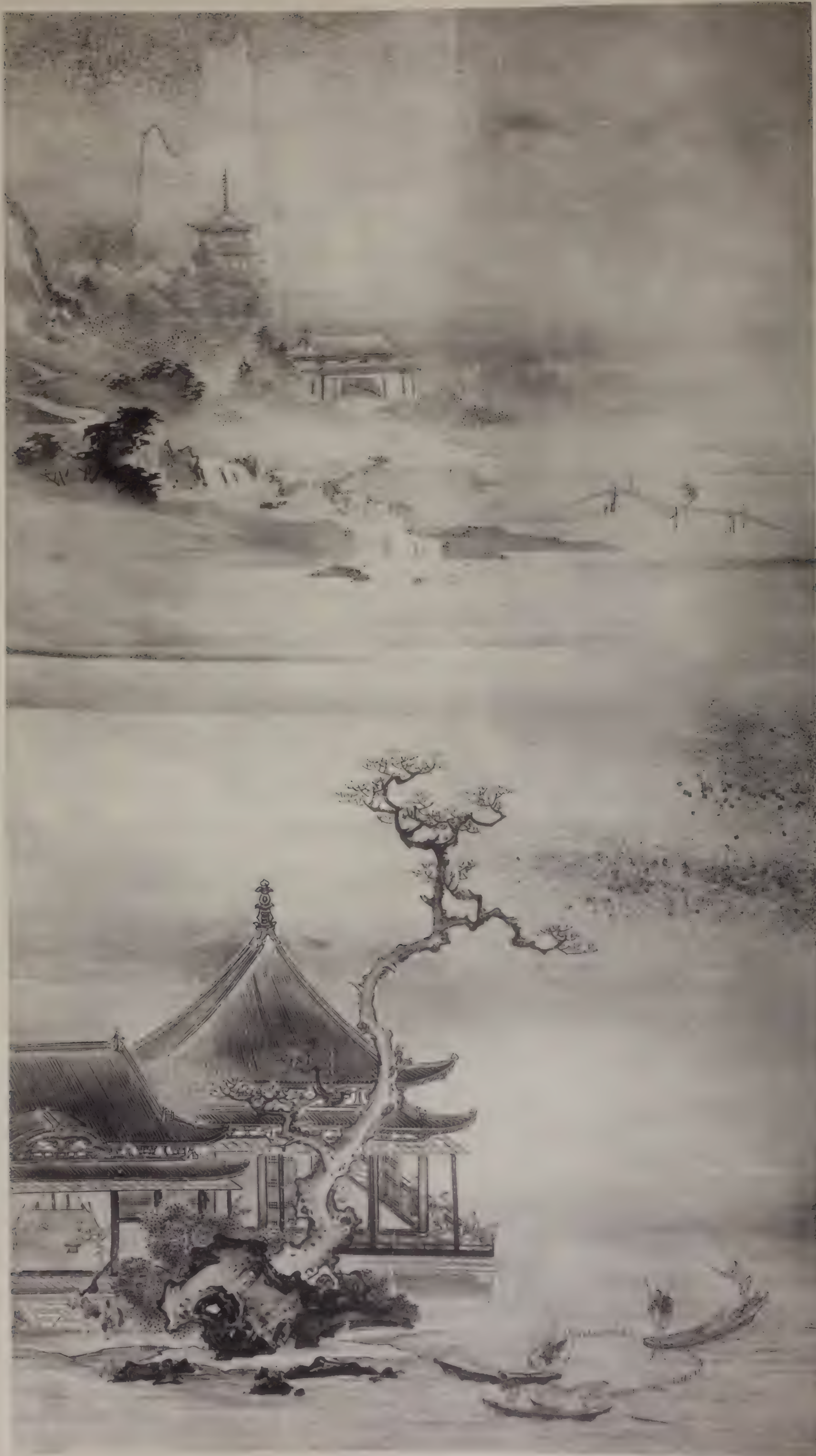
二條離宮內御襖　柳堤屋樹圖　狩野興以筆

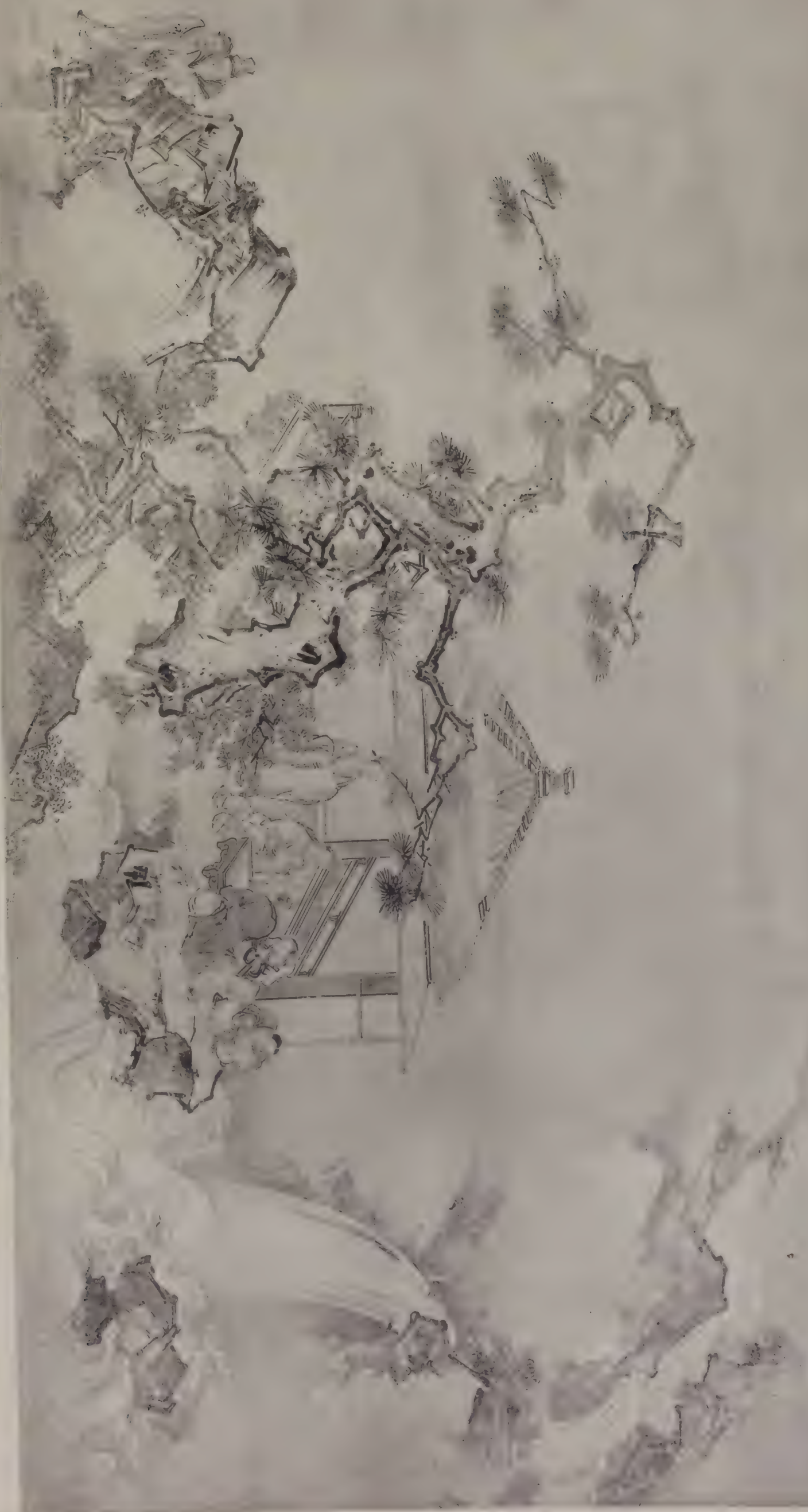
紙本金泥引淡彩　縱六尺三寸　橫四尺六寸

阿羅漢圖　松花堂昭乘筆　縱九寸三分　橫一尺四分　東京　益田孝君藏

山水樓閣圖　海北友雪筆

絹本淡彩　縱四尺一寸六分　横二尺一寸三分

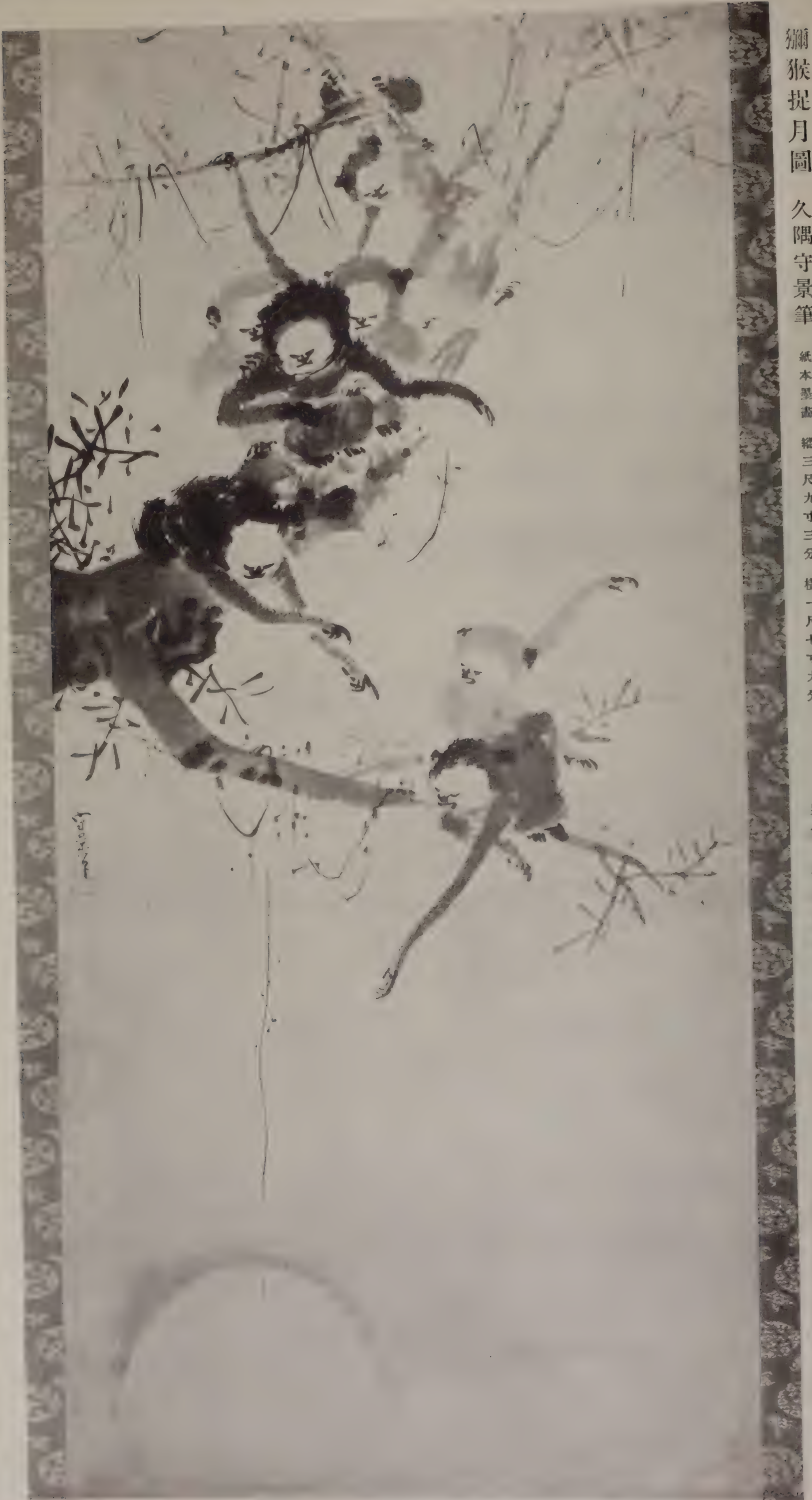
東京帝室博物館藏

盤谷圖　狩野山雪筆　紙本墨畫　縱一尺五分　橫四尺五分　男爵鄉純造君藏

名古屋離宮御張附 瀑亭雅會圖 狩野探幽筆 紙本著色 縱九尺九寸 橫一丈五尺九寸

二條離宮內御張附　泊舟雨鷺圖　狩野尚信筆　縦六尺六寸三分　横五尺七寸

桐鳳凰圖　狩野常信筆　縦五尺七寸六分　横一丈二尺一寸六分　東京美術學校藏

獼猴捉月圖　久隅守景筆

紙本墨畫　縱三尺九寸三分　横一尺七寸九分

男爵　横山隆俊君藏

蟬丸圖　英一蝶筆

絹本淡彩　縱三尺三寸四分　横一尺三分

伊勢國　小津與右衛門君藏

夏景山水圖　曾我蕭白筆

紙本墨畫　縱三尺七寸九分　横一尺四寸六分

京都　外村定治郎君藏

桐花鳳凰圖

土佐光起筆

絹本著色　縦三尺九寸三分　横二尺二寸九分

近江國　村田利兵衛君藏

宇治橋姫物語繪卷　住吉廣通筆　縱幅一尺一分　東京　片野邑平君藏

洛中洛外圖卷　住吉廣澄筆　絹本著色　縱幅一尺三寸五分　東京帝室博物館藏

養老瀧圖　田中訥言筆

絹本著色　縱三尺一寸五分　橫一尺七寸五分

東京　淸野長太郎君藏

婚怪草紙繪卷　浮田一蕙筆　紙本著色　縱幅九寸八分　京都　熊谷直之君藏

十二ヶ月畫巻　冷泉爲恭筆　紙本著色　縦一尺二寸五分　横濱　原富太郎君藏

萩兎圖　本阿彌光悅筆　紙本著色　縱五寸七分　橫上徑一尺八寸一分　男爵九鬼隆一君藏

群鹿圖巻　俵屋宗達筆　紙本金銀泥畫　縦幅一尺一寸二分　東京　片野邑平君藏

鷄圖　尾形光琳筆

紙本著色　縱三尺七寸七分　横一尺五寸七分

男爵岩崎小彌太君藏

四季花鳥圖卷　酒井抱一筆　絹本著色　縱幅一尺二分五厘　東京帝室博物館藏

齋宮女御圖　岩佐勝以筆　板面著色　縱一尺五寸六分　橫一尺　武藏國川越　東照宮藏

淺草田圃圖　菱川師宣筆　絹本著色　縱幅一尺六分　東京帝室博物館藏

美人圖　西川祐信筆

絹本著色　縱二尺八寸三分　横九寸九分

伯爵松浦厚君藏

觀劇圖　宮川長春筆　紙本著色　縱幅一尺二寸二分　東京帝室博物館藏

美人讀書圖　勝川春章筆

絹本著色　縱一尺二分　横八寸

東京帝室博物館藏

汐干狩圖　葛飾北齋筆　絹本著色　縱一尺八寸　橫二尺八寸六分　神戸　松木文恭君藏

大名道中圖　歌川廣重筆　縱一尺三寸八分　橫一尺八寸四分　東京帝室博物館藏

白雲紅樹圖　池野大雅筆

絹本著色　縱四尺二分　横一尺三寸二分

大阪　藤田傳三郎君藏

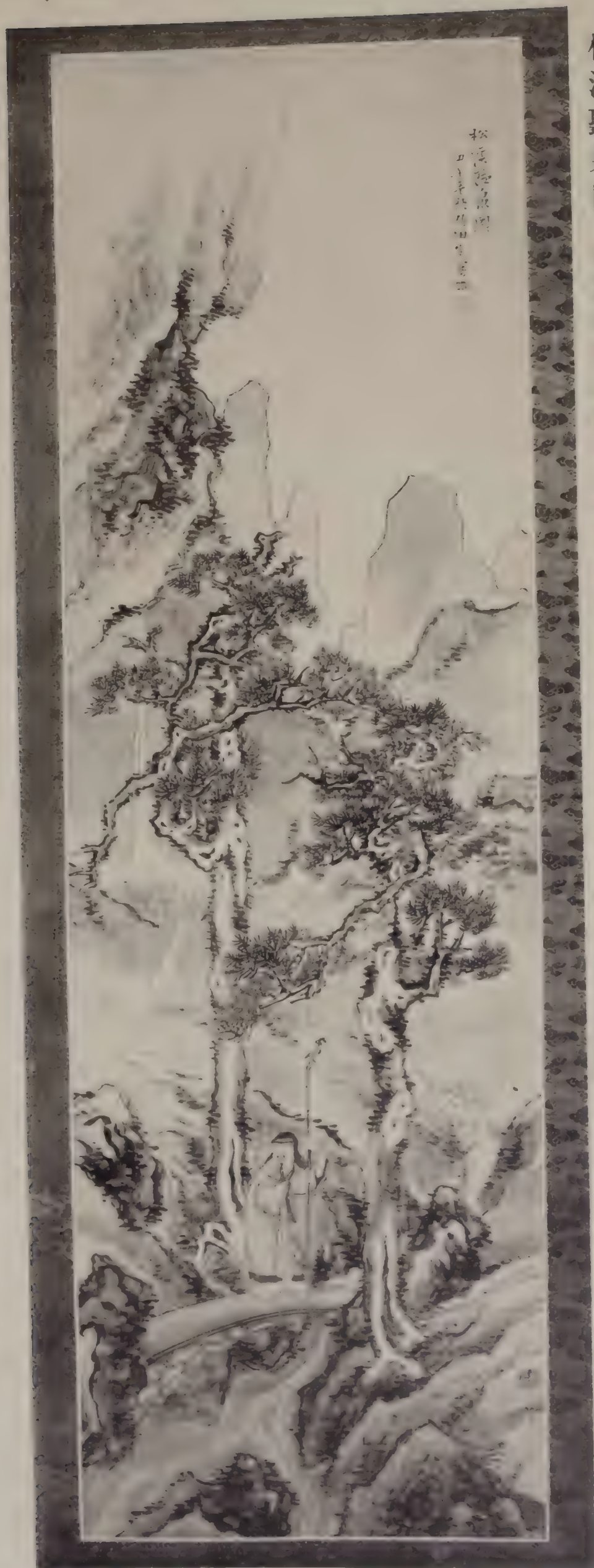
柳溪歸渡圖　與謝蕪村筆

絹本淡彩　縱四尺一分　横一尺二寸五分

男爵　岩崎彌之助君藏

松溪聽泉圖　田能村竹田筆

絹本淡彩　縦三尺八寸　横一尺一寸九分

大阪　生島嘉藏君藏

谿山疊嶂圖　谷文晁筆

絖本淡彩　縱五尺二寸　橫一尺五寸四分

京都　林新助君藏

魯生炊夢圖　渡邊華山筆

絹本淡彩　縱四尺八寸二分　横二尺三寸一分

東京　原六郎君藏

山水圖　岡田半江筆

絹本淡彩　縱四尺三寸三分　橫一尺四寸二分

近江　柴田源七君藏

花鳥圖　中林竹洞筆

絹本淡彩　縦四尺五寸四分　横一尺八寸九分

大阪　生島嘉藏君藏

菊花鶺鴒圖　椿　椿山筆

絹本著色　縱四尺八寸七分　橫一尺八寸二分

東京　吉田丹次郎君藏

秋景山水圖　山本梅逸筆

絹本墨畫　縱三尺三寸　横一尺一寸七分

美濃　古田義一君藏

松下鯉魚圖　圓山應擧筆

絹本淡彩　縦四尺二寸五分　横一尺八寸三分

伊勢　小津與右衛門君藏

潘妃圖　駒井源琦筆

紙本淡彩　縦三尺六寸六分　横一尺五寸

駿河　植松與右衛門君藏

贈
原驛蘭溪植松君
源琦寫

山姥圖　長澤蘆雪筆

絹本著色　縱五尺二寸　横二尺七寸九分

安藝國　嚴島神社藏

谿澗讀書圖　松村呉春筆

絹本淡彩　縦三尺三寸五分　横一尺二寸

京都　深見小兵衛君藏

漁父圖　岡本豐彥筆

絹本淡彩　縱四尺二寸　橫一尺八寸四分

大阪　清海復三郎君藏

雪中梅鶏圖　伊藤若冲筆

絹本著色　縱三尺七寸五分　横一尺八寸七分

京都　雨足曉藏

群猿圖　森狙仙筆　絹本著色　縱三尺二寸六分　横五尺二寸四分

男爵伊達宗曜君藏

孔雀圖　岸駒筆

絹本著色　縱七尺　橫五尺

京都　西村總左衛門君藏

明治四十二年二月二十五日印刷
明治四十二年二月二十八日發行

（國民畫鑑奥附）

編輯者　東京美術學校

印刷兼發行所　東京市京橋區新肴町十三番地
審美書院
（電話局新橋三〇五五番）